北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

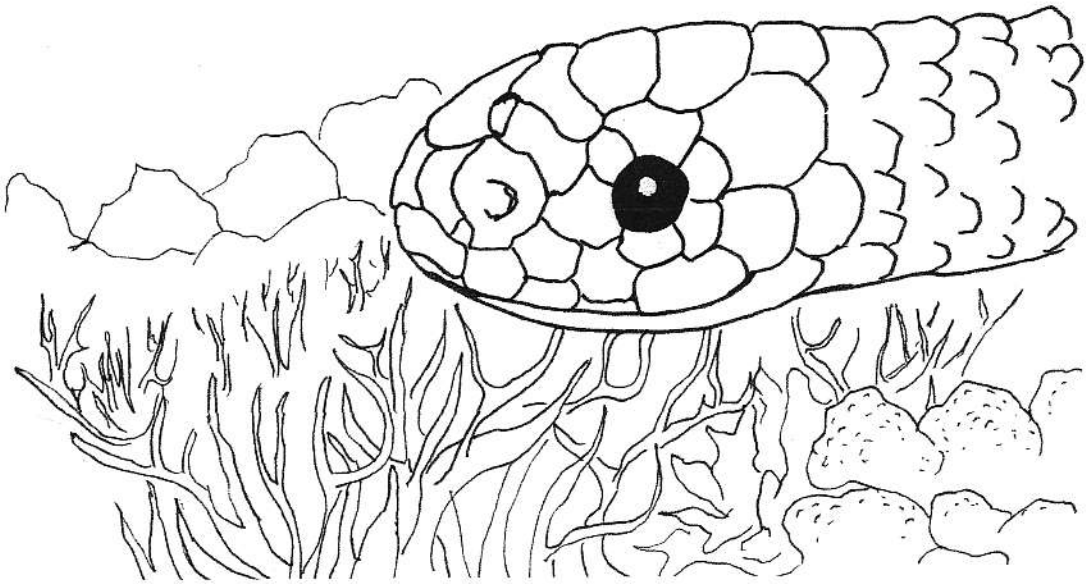
日本人会会報

Tarsius

タルシウス

平成25年1月

第24号



タルシウス　第24号目次

1	巻頭挨拶	大之木　英雄	第２頁
2	新年の挨拶	古賀　義雄　他	4
3	青春の思い出	粟竹　章二	6
4	マナドグルメ情報	今泉　　宏	１７
5	エチオピア案内	（日本エチオピア協会）	２０
6	領土について　　１，２	大貫　周明	２２
7	燃え上がった尖閣諸島	長崎　節夫	３４
8	会員名簿		３０
9	編集後記		４１

平成25年　元旦

新年御挨拶

呉水交会名誉会長

広島戦没者慰霊祭委員会会長

大和ミュージアム友の会会長

建国記念の日を祝う呉市民の会会長

大之木　英雄

ビトン日本人会の皆様、新春明けましておめでとう御座居ます。

旧年中は大変お世話になりましたが、今年も宜敷お願い申し上げます。

今年7月、呉水交会（旧海軍と海上自衛隊出身者の会）と致しまして御地に参り、慰霊祭を挙行させて戴く予定にして居りますので、何かと又御面倒をおかけするかと存じて居ります。

マネンボネンボの慰霊碑に関しては平素より一方ならぬ御配慮を戴き、心から厚く御礼申し上げます。マネンボネンボの慰霊碑を建立し、20年に亙って慰霊祭を挙行して参りました海軍第14期飛行専修予備学生 元山戦斗機隊の同期生諸君も皆90才に達し、肉体的に御地に参ることがだんだん無理になって参りましたので、御存知の通り数年前、公式慰霊祭を終了し、今後は誠に勝手ながら貴日本人会の御気持におすがりして御英霊の慰霊、又碑の管理をお願い申し上げて参って居る次第であります。改めて心から御礼申し上げたいと存じます。

然し、当方と致しましても何かと碑の今後について、又慰霊の行事について思うこと多く、偶々小生が会長をして居りました呉水交会（現在私は名誉会長です）が、戦没者慰霊行事の一端として5年に1度の見込でビトン、マネンボネンボを訪問し慰霊祭を行うということを決定して戴きましたので、小生としても安堵したところであります。

小生も健康が許せば是非7月にビトンに参りたいと思って居りますが、いずれに致しましてもビトン日本人会の皆様には大変お世話になることで御座居まして、何分宜敷お願い申し上げます。

御存知のように我が国の現状は、経済は元より財政、外交、国防、その他問題山積、一歩誤れば国家存亡の基盤も揺るぎかねない異常事態と理解致して居りますが、新しき年には国民一人一人グッと気を引締めて頑張らねばと決意致して居るところであります。

ビトン日本人会の皆々様もくれぐれも健康にはご留意の上、輝かしき良き新年をお迎え下さいますよう心より祈念して新年の御挨拶と致します。

（以上）

賀春

２０１３年元旦

タナワンコ　　古賀　義雄

私の旅行はインドネシアで止まったまま。で今年は15年ぶりに旅に出たい。

過去に行った所で、時代の移り変わりを感じさせられる先では、こんなところ。

・ゴールデントライアングル（タイ西北：メコンの大河と草原の地に今、2車線の道路）
・カイロ（エジプト：ナイルの水を飲んだ旅人はまた帰ってくる）
・イスタンブール（トルコ：2020年オリンピック候補地）＊ここのジョッキビールはうまい

新たなところ。

・バングラデシュ（チッタゴンのすぐ北にある、バティアリ海岸の船舶解体所）
・エチオピア（北部ダナキル砂漠で産する塩を、味わう）
　なおここを思い出したのは、本会報にエチオピア文を寄稿されている石野さんによる。

謹賀新年

今年もどうぞよろしく

Happy New Year

PT　HORIGUCHI SINAR INSANI

今泉　　宏

工藤　重一

あけましておめでとうございます

今年もよろしくおねがいいたします

BUNAKEN CHACHA RESORT

ダウニー　玲子

謹賀新年

今年もよろしくおねがいいたします

PT Fresh Tuna Indonesia (FTI)

阿部　栄治

本会報第19号に粟竹章二さんの回想録を掲載いたしました。00号掲載の文章は、「青春の思い出」と題して記された回想録のうちの、昭和19年のマカッサル着任前の記述から始まっていましたが、実はその前段がありました。

今回、氏の御了承を得て、その前段を掲載いたします。昭和19年、日本占領下のジャカルタの様子などが垣間見える貴重な記録です。

青春の思い出

粟竹　章二

人間誰でもいやな事楽しかった事など、いろいろな思い出を持っているものだけど、それならば思い出したくない嫌な思い出を忘れ、楽しかったことだけを思い出として残せば人生楽しく送れると思い、あの大変な戦争のときに今でも楽しく思い出されることの場面を、60年過ぎた今、忘れないように少し書き残してみたいと考え、このようなことをはじめました。

南方への憧れ

昭和18年8月夏、最後の滑空訓練合宿で念願の滑空士試験に合格し、9月に憧れの少年航空兵の試験を受けるべく資料をとりよせたら、視力は1.2以上、眼鏡不可とのことで、これは受験資格なしと涙を流し失望致しまあしたが、これが命びろいになりまして、もし合格しておりましたら今頃は靖国神社に居ることでしょう。

それならばと兄が陸軍の軍政要員としてインドネシアのジャカルタに居るから私は海軍の軍属として、やはりインドネシアに行きたいと心に誓いました。

兄は幼少のころより足が悪く障害をもっておりましたので、兵隊として御国に尽くすことができないと、軍政要員として志願致し、当時ジャカルタの魚市場の監理官として勤務しておりました。

ちょうど、兄の最初の上司のお父様が退役陸軍少将で親しく出入りをいたしておりましたので、参上致しご相談致しましたらとても喜ばれ、三男の方がセレベス民政部鉱産課長の安田三郎司政官で、「セレベス民政部の倅のところに行くように手配する」、と奔走してくださり、海軍省南方政務部部長の、お名前は失念いたしましたが、少将の方が郷里鹿児島の中学の後輩だからと直談判してくださり、募集締め切りにもかかわらず強引に追加試験をうけさせていただき、採用の運びになりました。これで兄と同じインドネシアに行けると、早速に二松学舎大学の夜学のマレー語講座に通ったり、インドネシア関係の参考書などを読みあさりました。

当時は戦時下の特例として12月にくりあげ卒業だったので、出発は極秘だけど大体1月の予定だと聞かされ、心の準備をして待っておりました。

1月に入り、海軍省から出発準備のための出頭命令がきまして、防暑服その他の支給があり、その内、任官すれば必要だから軍刀の用意をするようにとのことで、父と九段下の軍装店に軍刀を買いに行きました。その際、万が一のために短刀を買いまして、親戚の鶴子さんがとてもきれいな錦の生地で袋をつくり、門出を祝ってくれました。

出発も間近になり、親戚や学友を呼んで私のための送別会をしてくれることになり、父はあの物のない時代にどのようにして集めたのか、フグをはじめ軍部御用達の料亭でもあれだけは揃わないだろうというくらい、お魚を河岸から調達してくれました。

深川の河岸行きのなかで、日本舞踊の名手といわれた母方の叔父が、私のリクエストで座布団の中だけで「かっぽれ」を涙を流しながら踊ってくれたので、私も便所に駆け込み声をあげて泣いたのを覚えています。

父は、二人の息子のうち残った一人もまた戦地に出すのに、始終笑顔で学友に肴をすすめておりましたが、今思えば、さぞや胸のうちは寂しかったことと思います。

出発からシンガポールまで

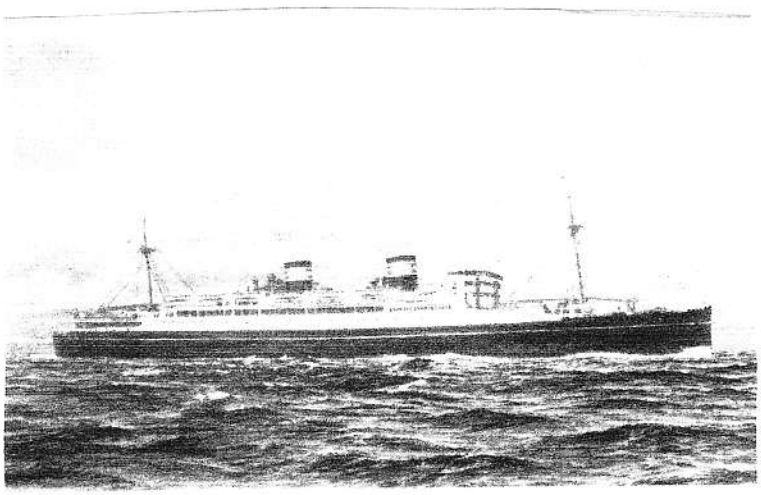
昭和19年1月30日に深川の家を出ました。
近所の方々や親戚や学友が見送りにきてくれまして、そのとき祖母とは今生の別れとなりました。 最初、私一人で佐世保まで行くつもりでおりましたら、父が一緒に佐世保まで行くというので驚きましたがとてもうれしく、この旅が父との別れになるかも知れないと心に思いました。

2月1日に、佐世保で当時の日本最後の豪華船浅間丸に乗船いたしましたが、現地係員の連絡ミスで出発の時間が間違えておしえられたためにあわや置いてけぼりになるところで、危機一髪で間に合いました。後日の戦友会などでよくそのことを戦友からからかわれました。
我々のグループは同じ民政部に赴任する七人で、戦後もそのお付き合いは続きました。
青木、浅野、邸(キュウ)、中村、真野、野坂氏、粟竹と、船室も同じでなかよく皆で歌などうたって、恐怖の毎日を送りました。
我々の船団は浅間丸を旗艦としての18隻の大船団で、途中、台湾の基隆沖で敵の潜水艦隊に襲われ、フランスより拿捕した最大の豪華船帝亜丸が目の前で轟沈し、その他多くの船が沈められて目の前でたくさんの人が死んでいきました。（後に、安田さんが海軍省に行き、部長に直接会って「私の息のかかった者を何故帝亜丸にのせなかったのか？」 と横槍をいれたそうですが、「マカッサル行きは皆浅間丸です」と断られ、かえって命拾いしてよかったと話しておられました。）
浅間丸も魚雷をさけるためにジグザグ航行で船体が異常に軋み、不気味な音は今でも耳に残っています。
しかし、死の恐怖を目のあたりにしていましたが何故か野次馬気分で、周りの徴用工の人たちがお念仏など唱えているのを見回し、舷側で魚雷の来るのを「あっちだ、こっちだ」と大声で叫び　、甲板士官にどやされ静かにしろと叱られました。
やはり子供のときからお祭り大好きなノーテンキで、このような危機に直面しても案外冷静に自分は死なないんだと信じている暢気物で、この性格は今でも変わらないと思います。
何度かの潜水艦の襲撃をのがれ、無事に占領地、昭南島とよばれていたシンガポールのセレター軍港に入港したのは2月10日のことでした。 2月12日にシンガポール東北部のローヤン兵舎につれていかれ、乗船待ちのために滞在することになりました。 兵舎では毎日、手旗信号やモールス信号、海軍体操など、また部隊抗の競技など行われ、充実した日々をおくりました。

いよいよ2月27日に出発が決まり、どこに行くとも知らされずものすごいオンボロ船に乗せられてシンガポールを出発しました。 ある日、甲板で乗組員に「どこに行くのですか」、と聞いたら、何の躊躇もなしに、「ジャカルタだよ」と言われ、飛び上がらんばかりに驚きました。 ジャカルタには兄がいると思うだけであとの二日間興奮して夜も眠られず、時の経つのをこんなに遅いものかと痛感いたしました。

浅間丸　（日本郵船）

就航　:1929年10月
喪失　:1944年11月1日
総トン数　:16,947トン
全長　:178 m
型幅　: 21.95 m
型深　: 12.95 m
喫水　: 8.689 m
主機関　:Di. 4基、4軸
航海速力　:18ノット
乗客定員　:839名
乗組員　: 329名



1944年11月1日南支那海航行中米潜水艦の雷撃により沈没した

兄と再会そして別れ　ジャカルタの三日間

３月１日に船はジャカルタのタンジュンプリオク港に入港しました。　この町に兄がいるというだけで胸がいっぱいになり、会えるだろうか、と心配致しました。

その日は海軍下士官兵集会所に泊まることになりました。　早速に管理所長の一等兵曹のところへ行きまして、おそるおそる「兄がジャカルタにいるのですが連絡をとることができますか」と聞き、「電話番号でもわかるか」と言われ、わかりませんと答えると、「ジャカルタには日本人が三千名もいるのでとても探しようがない」と言われがっかりしました。「お兄さんは何をしているの」と聞かれて、「パサルイカン（魚市場）に勤務しているそうです」と答えたら急に態度を改め、「あなた、パサルイカンの粟竹さんの弟さんですか」と言われ、そうです、と答えたら「粟竹さんにはお世話になっております。直ちに連絡いたします」と直ぐに電話をかけて兄を探し出し、私が到着した旨を伝えてくれました。

兄もさぞや驚いたことと思いますが、間もなくしてサイドカーに乗って到着し、３年ぶりの再会を果たしました。

兄は当初、別の仕事で赴任しましたが、昭和１７年４月に内地を出まして、９月ごろ占領地行政の安定に伴い、物資供給、流通機構整備の必要にせまられて魚市場を市が管理することになり、適当な人物をさがしていたところ、魚市場の仲買のせがれで長年市場で働きその機構に精通している兄・隆治郎が目をつけられ、日本人としてただ一人で市場に乗り込み、権益を損なうおそれのある華橋系高級職員たちと血みどろの攻防をかさねて遂に彼等を説得し、漁民には船舶用燃料油と魚とのバーター取引を開始し、漁業組合を設立させて魚価格の不当な廉価を防ぎ、沖買い横流しを防止して集荷量の飛躍的な飛躍を成し遂げ、高級魚には入札競り制度の導入で闇にながれる魚を市場に安定供給させるなど、多くの改革を行って軍や行政機関から何回も勲功章をいただき、ジャカルタでは「パサルイカンの粟竹さん」と、名の通る人になっていました。

本来、通過部隊は防諜のために外出禁止なのですが、所長の責任において特別に外泊を認められて、その夜は兄の官舎に泊まることができました。この件はあとで兄に聞きましたら、下兄は当初、別の仕事で赴任しましたが、昭和１７年４月に内地を出まして、９月ごろ占領地行政の安定に伴い、物資供給、流通機構整備の必要にせまられて魚市場を市が管理することになり、適当な人物をさがしていたところ、魚市場の仲買のせがれで長年市場で働きその機構に精通している兄・隆治郎が目をつけられ、日本人としてただ一人で市場に乗り込み、権益を損なうおそれのある華橋系高級職員たちと血みどろの攻防をかさねて遂に彼等を説得し、漁民には船舶用燃料油と魚とのバーター取引を開始し、漁業組合を設立させて魚価格の不当な廉価を防ぎ、沖買い横流しを防止して集荷量の飛躍的な飛躍を成し遂げ、高級魚には入札競り制度の導入で闇にながれる魚を市場に安定供給させるなど、多くの改革を行って軍や行政機関から何回も勲功章をいただき、ジャカルタでは「パサルイカンの粟竹さん」と、名の通る人になってい

ました。

本来、我々のような通過部隊は防諜のために外出禁止なのですが、所長の責任において特別に外泊を認められて、その夜は兄の官舎に泊まることができました。この件はあとで兄に聞きましたら、下士官兵集会所にもお魚の配給で所長とは顔見知りなので、特別の計らいをしてくれたとのことでした。

当時兄は、陸軍軍政監部最高顧問北島閣下の官舎の別棟に住んでおり、もう夜分遅いので明日ご挨拶致すことにして、その夜は明け方まで三年間の空白を語り明かしました。

翌朝、北島閣下はお加減が悪く伏せておられるとのことで、ご挨拶は後でと兄のサイドカーに乗り、勤務先のタンジュンプリオクにある魚市場に行きました。兄が幹部職員に紹介しますと皆さんが、よくご無事で、と喜んで歓迎してくれました。

そのあと、兄は約２００人の職員労務者を前にして朝礼と業務日程などの訓示をとても流暢なインドネシア語で行いました。高等小学校だけの学力しかない兄が、三年間であのようになるのは並大抵の努力ではなかっただろうと感心しながら、兄の姿をまぶしく誇らしく見ておりました。

そのあとは仕事の段取りをつけてからジャカルタ海軍武官府の前田海軍少将閣下の所に、私の赴任にたいしていろいろとお手配をいただいたお礼に参上するとのことで、とても美しい街並のナッシュボリバードにある前田閣下の官舎に参上いたしました。

閣下は会議のため不在でしたが、官舎には日本人の年配のご婦人が二人おられて、閣下から電話がありました、とお昼の仕度をして待っていてくださいました。

兄は、私が内地を出発してから音信普通なので心配して閣下にその旨申しあげたら、閣下が部下に調査を命じられてシンガポールまで来たことが判明したとのことでした。海軍では一番身分の低い一理事生のために武官府の調査とはまことに恐れ多いことでした。後でマカッサルに着任後、民生部で粟竹の着任を武官府から問い合わせがあったと不思議がられ、私は知らない、とシラをきり続けました。

後にインドネシア独立の影の立役者といわれた前田閣下にお手配いただいたことは誠に光栄なことでした。兄と共に参上いたしたときも、閣下からのお指図でお留守のご婦人がお赤飯と鯛の尾頭つきでもてなして下さいました。誠に光栄なことで、感激で胸がいっぱいになりました。それと兄に会えた緊張のためか体調を崩して下痢になり、せっかく私のにために作っていただいたご馳走もたべられませんでした。ご婦人方と兄は懇意らしく、私たちの再会を涙をうかべて喜んでくれました。

しかし、なぜ兄が北島閣下や前田閣下など、当時、飛ぶ鳥をおとす勢いの陸海軍の高官にかわいがられお付き合いがあったのか不思議で、これも兄の人柄にとるものなのかと思っています。

その後、兄のサイドカーでジャカルタの街をくまなく見物し、同行の皆さんは宿舎で缶詰になっているのに私だけが良い思いをして申し訳ない気持ちでした。

見物を終って一旦宿舎にもどり、その晩は集会所の所長の好意で私のために歓迎と送別の宴が開かれました。北島閣下の秘書官の常吉司令政官（佐官待遇）をはじめ、ジャカルタ市役所や市場の幹部職員、兄の上司や同僚の方々がたくさん参列しました。

兄は魚市場から良いお魚をたくさん厨房に運び込み、中国系の料理人が腕をふるって戦時下の内地ではお目にかかれないような大ご馳走で、同席した宿舎の所長もこんなご馳走ははじめてだ、と言っていました。

兄が、もう二度と会うことができないかも知れない弟に出来得る限りのことをしてやろうという気持ちがとても嬉しく、何もいえずに目を真っ赤にして涙をこらえておりました。私はご馳走を目の前にしても下痢のために食べられず残念でしたが、それよりも感激で胸が熱くなり、涙をこらえるのが精一杯でした。兄もやはり箸が進まず、私と同じ気持ちではなかったかと思います。あと幾日かでもう二度と会えなくなるかも知れないと思うと、さすがのノーテンキの私も複雑な心境でした。

私の具合が悪いのを聞いて、所長がお粥を作るように命じ、コックさんご自慢のお粥を作ってくれました。そのおいしかったこと。世の中にこんなおいしいものがあるかと感心して、いまだにあの味は忘れません。私はなぜか戦時下でも食べ物にめぐまれ、戦後ももの不足の時代にも食べ物で辛い思いをしたことがなく、良い星の運をもてたのだと信じております。

その後、兄がたくさんの品物を用意してくれまして、とくにトランクは皮製のすばらしい大型のWのトランクで、その中にめずらしいコードバンの短靴や防暑服をつくる白の洋服地など、内地では見られないものばかりトランク一杯に詰めてくれました。内地からもって来たものは古いトランクとともに兄に処分してもらいました。

これらの品々は任地にて人に差し上げたり、トランクは引き上げの際マリンぷんに置いてきたし、シーマの時計やウォーターマンの万年筆はやはりマリンプンで蘭印軍のアンボン兵に強奪され、何一つ持って帰ったものはありません。

兄と翌朝出発のジャカルタ中央駅に来てくれることを約束して寝ることになりましたが、なんとなく興奮して寝付かれないで夜があけました。

駅に行きますと、広い無人のプラットホームに特別軍用列車が止まっていて、それに乗り込んでいますと常吉秘書官はじめ昨晩みえた方々が大勢見送りにこられて、車中でたべるお菓子や、その他たくさん餞別をいただきました。もちろん見送りはその方々だけで、皆さん声をかけて激励して下さいまして、これも兄の人徳のおかげ、と感謝いたしました。

兄が下男にいいつけて大きな籠いっぱいのめずらしい果物を列車に積み込んでくれまして、幸いおなかのほうも回復してスラバヤまでのおやつは十分で、車両の皆さん全員にもおすそ分けしました。

発射の時間が迫りますと兄の顔をみておられず、胸がいっぱいで言葉も出ず、兄がなにか言っているのも耳に入らず、もうこれが今生のお別れかと涙で何もみえず、汽車が動き出して兄の手が離れた途端に恥ずかしくも声をあげて泣きくずれました。そのとき、青木さんがやさし

く肩をだいて、「思い切って泣けるだけ泣けよ」と言ってくれました。

泣けるだけ泣いたら今度はすっきりして、御粥腹だったので空腹をおぼえ、仲間と談笑しながら差し入れのお菓子や果物を食べました。

汽車は薪を焚く機関車で、大きな火の粉が飛んでくるので窓を開けることができず、座席も木製で尻が痛くなりますが、もう命の危険は無く、おやつもたくさんあるし、窓外のめずらしい景色を眺めながらスラバヤまで二日間のジャワ島縦断の旅は浮き浮きした行楽気分で、戦争を忘れた安らぎの時間でした。

汽車は、スマランも過ぎて３月４日夕刻にスラバヤに到着しました。その夜はスラバヤに泊まり、翌日、船待ちのためにマランに移動、吾妻ホテルに投宿しました。

マランは、スラバヤから２００キロほど離れた軽井沢のような素晴らしい高原の避暑地で、オランダ時代からの高級住宅街でした。

夢のマランの一ヶ月

戦時中の我々の年代でホテルに泊まることなんてあり得ない時代でした。宿屋は経験がありますがホテルは初めてのことで、しかも長期滞在とは夢のようなことでした。

部屋には大きなダブルベッドがあり、ベッドの上に細長い枕の親分のようなものが置いてありました。これは抱き枕（バンタルプロー）というもので、抱いて寝るととても涼しくお腹も冷えないので寝冷えの予防にもなり、私は後のマカッサルでも帰国のときまで愛用しました。

ホテルでは中村泰氏と同室で、このことがご縁になり現在にいたるまで無二の親友として、泰ちゃん、章ちゃんと６０年間も家族ぐるみのお付き合いをしております。

中村氏はこのあともマカッサル、マリンプンでも生活を共にする不思議な結びつきでした。彼は帰国後明治大学に進学し、卒業後は銀座の老舗、田屋洋服店に入社いたし、以後一貫して男子服装業界を歩み、ネクタイ、高級シャツなどの会社の経営幹部を勤め、色彩関係のエキスパートとして活躍致し、現在は業界仲間のコンペの会長として忙しい毎日を元気でおくっています。

この夢の楽園のようなマランの生活は、これまでひもじい思いをしてきた我々には毎日の食事も楽しみで、内地の家族に食べさせたいなと思ったりしました。

ホテルの前には大きな公園があり、その中をお伽の国の汽車みたいのが走っていて、郊外のモンキーセンターまで行くそうです。公園を横切ると映画館があり、入り口で敬礼すると無料で見せてくれました。その斜めに、大きな軍の酒保があって毎日午後１時に開店するので、そこに並んでビールの券を貰うのが日課になりました。売店ではチレボン製のタバコ、コーラやLUXの石鹸なども売っていました。その品々を使いもしないのに買ってホテルの箪笥の棚が一杯になりましたが、酒保でなかよくなった陸軍の航空隊の兵隊さんに、前線に出動するとき

にプレゼントしてとても喜ばれました。

酒保の品物はとても値段が安い上に現地の女性が大勢いるので毎日通って何時間もねばり、インドネシア語の勉強のためにいろいろと話をして楽しい時間をすごしました。

「インドネシア語を早く上達したいならガールフレンドをつくることだ」、と教えられていたので、ジャワ人のチンチェ、リンチェ姉妹となかよくなりました。姉のチンチェは２０歳でとても頭がよく、上手に教えてくれました。妹のリンチェは１７歳で、いつもニコニコしておとなしく可愛い少女でした。インドネシア語が少しはなせるようになると毎日その時間がくるのが楽しみで、彼女たちも私の上達を喜び、ますます学習に熱がはいりました。

我々が日参した店がもうひとつありました。世界的に有名なアイスクリーム屋さんで「イタリア人の店」というのが、本店がスラバヤにありマランにも支店をだしていました。ホテルの支配人が、ぜひたべに行きなさい、と教えてくれまして泰ちゃんと二人ででかけました。

街外れの静かな場所に目立たないお店ですが。とても美しいハーフの店員さんが迎えてくれて、大きなカラー印刷のメニューを見せてくれました。そのメニューのおおいこと！アイスクリームはこんなにいろいろあるのかと驚いてしまい、どれからたべようかと迷った末にまず番号の一番から注文しました。出てきたのはパイナップルのアイスで量も日本の３倍くらいでその美味しい事！　生まれてこのかたこのようなアイスを食べたことがなく、二人で感激いたしました。しかしお値段もそれなりに高く、酒保のタバコが８セント、石鹸１０セント、ビール12 セントのときに 20 セントもしました。けれどもこの味は覚えたらやめられず、それ以後毎日通って番号順に食べてていきました。どれも全部味が違い、デコレーションもトッピングも量も違いました。ものによっては、銀の大皿一杯で満腹になることもありました。

もっとも印象に残っているメニューは「グヌンアピ（火山）」で、大きな銀皿に何種類かのアイスで山を造り、その周りを果物その他で飾り、頂上にはブランディーかで火がついているすばらしいもので、お値段も最高で確か 70 か 80 セントでした。

私は毎日でもよかったのですが、辛党の泰ちゃんは飽きがきたというので私一人で通うようになりました。店ではすでに顔なじみなので、言葉も数多く話せるようになって世間話に近い会話もできるようになりました。店に入って席につくと、黙っていても次の番号の品を持ってきてくれました。

今になって考えてみますと、あの時代にどうしてあのような高度な製造技術があったのか、冷凍の機械が発達していたのか不思議に思えますが、マランの忘れられない楽しい思い出のひとつです。

会話ができるようになると生意気になり、昼間の酒保のまじめなおねえちゃんでは物足らなくなり、青木先輩がリーダーとなって軍指定のキャバレー風の酒保に行くようになりました。そこには色の白いハーフの素晴らしい美人たちが大勢たむろしていて、軍国少年としてはまさ、

にこの世のパラダイスで、別世界に入ったような気持ちでした。
俸給が 27 円で全額家族渡し、現地でもらえる外地手当てが 35 円、出発のときに支度金として軍票で 300 ギルダーもらい、父が何かのときにとお守り袋の中に百円札を 2 枚入れてくれたのをジャカルタで兄に両替してもらったのがあって懐は温かかったので、毎日食べたり飲んだり買い物をしたり、優雅な天国にいるようなお大仁の生活でした。しかし、夜の酒保の代金は昼間の数倍で、そんな場所に時々いけばお金は飛ぶように無くなり、皆の財布は底をついてきました。ついに、スラバヤの民政部の連絡事務所に給料の前借に行くことになり、私と青木さんが代表で行くことになりました。

マランの輸送司令部に行き、公用腕章と汽車の切符を貰いましてスラバヤま 2 時間の旅にでかけました。スラバヤでたずね歩いてやっとの思いで事務所にたどりつきましたら、「とんでもない奴らだ」と叱られまして、マカッサルと連絡を取り、私たちと同行の農業指導員 30 数名の分を後日マランに届けてやる、とその日はお金はくれませんでした。

先日ジャカルタを出発するとき、兄から、スラバヤでもし困ったことがあったら連絡しなさい、とスラバヤ市役所の友人のメモを預かっていたのを思い出し、役所にその方を訪ねていきました。ちょうど出張中だということで同僚の方に訳を話したら、帰ったら用件を伝えると言って下さいました。

その日は空振りでしたが後日スラバヤから電話があり、兄が 100 ギルダー送ってきたから届けてあげたいが、忙しいのでできたら取りに着てほしいとのことで、どうせ汽車賃はタダだしまたスラバヤに行けると喜んでいたら、浅野の健ちゃんが「俺もその手を使う」と同行することになりました。

彼のお父さんは同盟通信社の重役なのでスラバヤの支局に行きまして支局長に話しましたら、すぐに相当高額の金を貸してくれて、私を除く他の 5 人の分も用立てることができました。

この道中でとても面白いことがありました。11 時ごろ 2 等車でマランを出発したあと、車内に岡持ちのようなものにいろいろな種類の食べ物を持って回ってきました。周りを見回すと現地の方も好みの物を取り、食べ始めました。私たちもそれに習って美味しそうなものを取り「ブラパ？」と聞きますと、「ナンティ」というので、周りを見ても誰も払っている様子はないし、きっとあとで皿を下げるときに払うのだろうと思っていました。

そのうちに汽車はだんだんスラバヤに近くなり、私たちは終点でなくひとつ手前の駅で降りるので、駅は近いし集金は来ないしヤキモキしているうちに駅に着いてしまいました。どうしようかとマゴマゴしていると隣の席の初老のご婦人がニコニコと「ティダアパアパ、シラカンプルギ」とウインクして促しました。二人でなにか後ろめたい感じで汽車を降り、「食い逃げだ」と駆け出しましたが、もっとたくさん食べればよかったなと大笑いしました。

その後、二度とそのような幸運はありませんでした。

暫くして、スラバヤ事務所から太田原書記他 1 名がまいりまして、農業指導員や私達全員を並べ、「この非常時下にしかも戦地にありながら毎晩飲み歩いて金がなくなり給料の前借とはなにごとか。非常にたるんでおる」と延々とお説教を受けました。皆恐縮して深く頭を下げ、

申し訳のない悔悟の念にうなだれておりました。お小言が終わり、皆解散してから太田原さんが「民生部の者は残りなさい」と言われたので、まだ続くのかとうんざりしていると、にこにこと態度をがらりと変えて「君たち巧くやったな。マカッサルに着いたらこんな所はないよ。ここにいる間は充分あそんでおきなさい。今夜は皆で楽しくやりましょう」と、夜の街に繰り出しました。

最初の店は民生部の先輩として太田原さんの奢り。あとはいつものお馴染みの店で、お金も入ったことだし、ドンチャン騒ぎの大宴会になって12時の閉店まで飲み続けました。

あとでご本人に聞きましたら、本当は私たちが連絡事務所に行った時にお金を渡してもよかったのだけれど、太田原さんもマランで遊びたかったので後で届けると言ったのだと、またお説教は、「あのように言わなくてはカッコウがつかないだろう」、と笑っていました。太田原書記にはこれがご縁で後々までお世話になりました。

マラン滞在は早くも1ヶ月近くもなり、毎日のお決まりのコースも馴れて、戦争をしているのも忘れるような楽しい日々が続いていましたが、ある日、近く出発するからそのつもりでいるように、と通達がありました。

インドネシア語の学習でお世話になった姉妹に、お金もあることだし奮発して金の指輪を買って御礼にさしあげました。お別れだと気がついたらしく涙を流して指輪のお礼を言ってから、姉が「実は妹は粟竹さんが好きだった」と言って、二人で抱き合って泣いていました。私はそんな気持ちはさらさら起こらなかったけれど、何となく毎日会いたかったのはやはりプラトニックラブというものかな、と急にいとおしく思い、握手をしてわかれました。

もう、おばあさんになってしまっただろうけど、あれからあの姉妹は幸せな生活をおくったのだろうか。ご多幸を祈るばかりです。

4月3日にマランを出発してスラバヤに向かいました。民生部連絡事務所の指示で市内のホテルに泊まり、4月4日にスラバヤ港から小さな1,000トンくらいの貨客船大丸にギュウギュウ詰めに乗り込みました。

スラバヤでは太田原書記から格別のご配慮をいただき、後輩の我々に便宜を図っていただきました。

また、スラバヤのホテルで朝食のとき、隣のテーブルに従軍報道員の腕章をつけた作家の森田たまさんがおられ、「お若いのにどちらにいかれるのですか」と聞かれました。「マカッサルです」と答えると、「私もマカッサルには行きましたがとても綺麗なところです。でも、イタリア人のアイスクリーム屋さんはありませんよ」と、30分くらい談笑しました。

大丸の9日間の旅

大丸に乗船してまず最初の仕事は、狭くて厚くて横になる場所もない客室から出て、はやく外

のデッキの良い場所を確保することでした。これは太田原さんの入れ知恵で、仲間に耳打ちしてそれぞれいち早く場所を確保でき、おかげで日中は暑いが夜はとても快適で、見張り当番以外はぐっすりねむることができました。

そのうち、船はボルネオのコタバルに入港しました。コタバルはとても美しい、ひなびた景色の漁港といった感じでした。何よりも驚いたのは海水のきれいなことで、そうとう深いのに海底まで透明で、色とりどりのきれいな大小の魚が沢山泳いでいて、まるで水族館の水槽を見ているようで全員が歓声をあげて喜びました。

さっそく農業要因の皆さんが海に飛び込んで、気持ちよさそうに泳ぎはじめました。私たちもそれに続けとばかり飛び込もうとしたら甲板下士官がとんできて、「この海には猛毒をもつクラゲと海蛇がいるから泳いではいけない」と叫びましたので、皆おどろいて我先にと船にあがってきました。

あとで聞くと、毒蛇はいないが遊泳を禁止させるための方便だったとのことでした。大丸はマカッサル海峡で敵潜水艦による被害がでたのでコタバルを出発することができず。のんびりと四日間停泊していました。マカッサルを目の前にして、ほんとうにイライラした気持ちでしたが、現地住民が毎日小舟で果物やらお菓子などを売りにくるので退屈はしませんでした。着任すれば大変な仕事が待っているのだから最後の休養だと、コタバルの4日間を楽しみました。

マカッサル到着

スラバヤからジャワ海を渡ってコタバル、さらにマカッサル海峡を無事に乗り越えて佐世保出港以来72日間の旅も最終目的地マカッサルを目の前にすることになりました。

4月13日、目的地マカッサルの岸壁に到着しました。船上から見たマカッサルの街は、緑が多く、白い壁と赤い屋根が点々と見える、それは美しい街でした。

私は、感激で胸がいっぱいになり、涙がながれ、感無量の状態で立っていましたら、突然岸壁から「粟竹、粟竹はいるか」と大声が聞こえました。思わず目を凝らしますと、なんと、母校帝商の先輩大村さんが手をふっておりました。驚いて駆け寄りますと、「遅かったじゃないか、マランでうまいことやりやがって」と到着早々どやされて、無事の着任を祝ってくれました。私も大村先輩がマカッサルにいるとは知らなかったので、とてもうれしく、心強く感じました。

この大村先輩と中村さんとは、以後、切っても切れない深い友情で結ばれ、兄弟のようなお付き合いが生涯続きました。

その夜は中華街のホテルに泊まりまして、翌日から海軍の規則、組織、民政の概要、その他の講習と訓練が2週間続きました。（タルシウス第19号に続く）

メナド・グルメ情報

今泉　宏

今年の４月に長年お世話になったPT.ARTA SAMUDRA（ビトン）を退職し５月からPT.HORIGUCHI SINAR INSANI（タリセ島）へ入社しました。それにともない拠点をビトンからメナドに移し、今は月曜日から金曜日までタリセ島で過ごし土日はメナドで休むという生活をしています。

今回はビトンから比べると大都会のメナドで見つけたグルメスポットを紹介したいと思います。

☆朝食スポット

通常金曜日の夕方までには自宅へ帰っているので土曜日の朝は早起きして小学生の娘を学校まで送っていくようにしています。娘を学校へ送り届けたらその後の数時間は自由時間となり、お待ちかねの朝食タイムです。

まず最初に紹介したいのはブブル・アヤムの屋台です。場所はホテル・アストンの向かい辺りにある路地の入り口付近にあり、いつも４、５人の客がたむろしているのですぐに分かると思います。白いおかゆに数種類の付け合わせを乗せて黄色いスープとお好みで唐辛子を入れて出来上がりです。トッピングとしてレバーや心臓など数種類の内臓の串刺しを選ぶことができます。味が濃いので毎日はちょっとと思うけどたまに無性に食べたくなる味です。路地は狭いので車は中まで進入しないで大通りに路駐しておけばオッケーです。

メナドで朝食と言えばティヌトゥアンかナシ・クニンが有名ですが今回はナシ・クニンの美味しいお店を紹介します。有名どころで「SAROJA」（でしたっけ？）というお店もありますが、僕がよく行くのは「SEDERHANA」というお店です。中国人街の方にあるプラザホテルの前の通り沿い進行方向（一方通行）に向かって左側にあります。ナシ・クニンはごはんの炊き加減などももちろんですが具の味や質、量、種類などが重要な役割を果たします。したがって「SEDERHANA」のように１万５千ルピアぐらいする高級ナシ・クニンはやはり具がしっかりしているので道端で売っているナシ・クニンとは一線を画しています。

中国人街へ行く道（ホテルプラザへ行く道）を朝通るととても賑わっている一角があり、中でも「フレッシュ・ベーカリー」にはプチ行列がしばしばできるほどです。客のお目当てはベーカリーというからにはパンかと思えば何と「クア・バクソー」か「ロバ」なのです。「クア・バクソー」はただのバクソースープではなくよく煮込んで柔らかくなった腸など内臓が入っていてだしもよく出ているので熱いご飯にかけながら食べるとよく合うのです。「ロバ」とは、豚肉（蒸し

たのか茹でたのか？）ときゅうりをきざんだものに甘辛のみたらし状のタレをかけたものです。このみたらし状のコラーゲンたっぷり（と思われる）のタレがこれもご飯によく合い、癖になるのです。

最後に紹介するおすすめ朝食スポットは、ご存知マクドナルドです。朝の６時から開いていてちゃんとしたコーヒーを飲める店はメナドではここしかないのではないでしょうか？しかも値段は１万ルピアほどで無料でおかわりもできるのです。ホットケーキやマフィンを食べながら美味しいコーヒーを頂くのもたまにはよいものです。エクセルソやブラックキャニオンもマクドナルドを見習って欲しいものです。

☆ピザスポット

あれは僕が高校生の時、「ポアンカ」という小さな喫茶店で生まれて初めて薄生地ピザを食べました。あまりの美味しさにおかわりをしてしまったのを今でも鮮明に覚えています。今まで食べていた厚い生地のピザは何だったのか？僕はトマトソースと香ばしいとろけるチーズのハーモニーを楽しみたいのに厚い小麦粉の塊が口の中でくちゃくちゃと邪魔をし、もっとたくさん食べたいのに強制的に満腹にさせられてしまう。それが当然だと思っていました。しかし「ポアンカ」の薄生地ピザは僕にもう小麦粉の塊は食べなくてもいいんだよと教えてくれたのです。それ以来僕は薄生地ピザを愛するようになりました。

その後大学を卒業しインドネシアへ赴任となり、最初の勤務地ソロン（西パプア州）は絶望的な田舎でピザのピの字も思い浮かばない場所でした。そんな囚人のような生活からも数年で卒業し、何と誰もがうらやむバリ勤務となったのです。休みにはクタなどへ出かけてピザはもちろん日本食、洋食、韓国料理、インド料理、メキシコ料理、手当たり次第に食べまくりました。しかし、そんな幸せな日々も長くは続かず、２年ほどでビトン勤務を命じられました。当時はメナドと言えどたいしたレストランはなかったのですが、今のモールが建っている辺り（多分）に「サンセットカフェ」というとなかなかおしゃれでピザも出しているお店がありました。そう言えばあのお店は今の妻の両親を招待して結婚の許しを頂いた思い出のレストランでした。。。その後「サンセットカフェ」は閉店し埋め立てが始まりあっという間にメガモールが建ち、その中にはピザハットができていました。期待して入ったピザハット、小麦粉の塊でした。。。チーズも何だかガムみたいでいまいちです。

ピザハットにがっかりさせられ数年が経ち、メナドに空前の好景気が訪れました。有名ホテルが乱立しレストランのメニューにもピザがのるようになってきたのです。

まずはホテルアストン。オープン仕立てのころは薄生地で、これでメナドでも

美味しいピザが食べられると大喜びしたのもつかの間、次に訪れた時には厚生地に変わっていました。メナド人は質より量だからそれに合わせたのでしょうか。。。とても残念です。

次はクオリティーホテル。当時ピザフェアーみたいなのをやっていてその時食べたピザは薄生地でいけてました。今でもメニューがあるのかどうかは不明です。

そして、スイスベルホテル。ここは質より量。お腹のすいた人にはお勧めです。僕は一生ここではピザを食べないことにしましたけど。

どうもメナドと薄生地は相性がよくないようでメナド人はピザと言ったらチーズを食べると言うよりも小麦粉をたくさん食べたいようですね。

そんなあきらめムードの中最近オープンしたメガマス内の「Cabal」というお店はついにやってくれました。薄生地ピザを堂々と出しています。ビールも冷えていて美味いです。当分外食は「Cabal」ですな。

と言うわけで長々と書きましたが結局、現在確認できているピザスポット（薄生地）は「Cabal」のみということになりました。

メナド・グルメ情報と題して書いてみましたが、あんなにたくさん飲食店が立ち並んでいる割にほんとに薦められるお店って少ないですね。ただ、今回ご紹介した朝食スポットはなかなかお薦めです。たまには早起きして、空気が澄んでいて交通量も少ない朝の時間帯にメナドの街を散策してみるのもよいものです。

こんにちは、日本在住エチオピア人のアムサルです。私の国では、「テフ」というイネ科の穀物の粉に水を加えて発酵させ、鉄板で薄くクレープ状に焼いた「インジェラ」というのが主食。ちょっと酸味のあるインジェラで、「ワット」と呼ばれるお肉や野菜のシチューを包んで食べるの。インジェラの酸味とワットの辛味が絶妙！今回は、エチオピア料理のなかでも代表的な「ドロ・ワット」（鶏肉と玉ねぎを辛く煮込んだ料理）を紹介するので、皆さん、是非、チャレンジしてみてね☆

ドロ・ワットの作り方

《材料（4～5人分）》
鶏皮140g、鶏手羽元400g、玉ねぎ3、ゆで卵4、トマトピューレ100g、にんにく4片、おろし生姜小さじ2、油大さじ2、粉唐辛子大さじ4、シナモン小さじ1、各種スパイス（コリアンダ、カルダモン、ナツメグ、クローブ、オールスパイス、パプリカ）少々、バター小さじ3、塩・胡椒適量、水適量

Culture

①みじん切りにした玉ねぎをフライパン（鍋）で1～2分炒めてから油を加え焦げ付かないように中火で7～8分炒める。軽く火が通ったら粉唐辛子、シナモン、各種スパイスを加える。

②焦がさないように、時々水を加えて炒めながらミートソースくらいのゆるさにする。次に鶏皮を加えて更に弱火で炒める。

③鶏皮から油が出てきたら、鶏手羽元を加え弱火で20程度煮込む。ここでも、水分が足りければ、少し水を足し、時々かき混ぜる。

④にんにくのみじん切り、おろし生姜、バターを加えかき混ぜる。その後、ゆで卵を加える。味がしみるように切込みを入れておくと良い。

⑤ふたをして弱火で煮込み、塩・胡椒で味を調える。卵に味がしみたら出来上がり！

⑥日本ではインジェラがないので、トーストやご飯に合わせても美味しい！

エチオピアでは「グルャ」といって、人に食べさせてあげる習慣があります。エチオピア料理を食べるときは家族や友人に「あーん」と言って食べさせてあげましょう！

最後に・・・ 地域や家庭によって、異なる料理方法や味があり、エチオピア料理は奥が深いです。辛くない料理や生肉を食べる習慣もありますよ。是非、一度はエチオピア料理にトライしてみて下さいね。

エチオピア料理、「ドロワット」のレシピ

本会賛助会員で日本エチオピア協会理事でもある石野さんからエチオピア案内のパンフレットが届きました。ページをめくって「これだ！」と思ったのが下のドロワットのレシピです。材料は北スラウェシのどこにも転がっているものばかりです。鶏手羽元のかわりにコウモリの羽でもいけるかも。

日本国内でエチオピア料理が食べられるレストラン（ベスト４　）

東京都　；クイーン　シーバ
　　目黒区東山１－３－１　ネオアージュ中目黒 B1F　03－3794－1801
東京都　　サファリアフリカンレストラン
　　港区赤坂３－13－１　ベルズ赤坂２F　　03－5571－5854
大阪府　　エチオピアレストラン　アクスム
　　東大阪市中央区東心斎橋１－17－15 丸清ビル５F　06－6241－5838
福岡県　　ファシィカエチオピアンダイニング
　　福岡市中央区大名１－11－13　Ds Face ビル３F　092－771-7123

エチオピア流コーヒーの淹れ方　-コーヒーセレモニー

Culture

1 洗って銀皮を除いた生豆を入れて炭火を使った焙煎スタート。3分位で豆が色づきはじめます

2 5分位で煙が出て、パチパチ豆のはじける音がする。濃い茶色から少し黒色を帯びたら、すぐ皿へ

3 色の濃い豆は、味が悪くなるので取り除き、木臼で粉状になるまで細かく砕く。この間に湯を沸かす

4 熱湯に挽いた粉を入れ、沸騰したら弱火で4~5分煮出し、ポットを斜めに置いて、コーヒーの粉を沈殿させる

5 淹れたてのコーヒーは濃く見えるが爽やかな豆の果実のような味わい

エチオピアのコーヒーにまつわるエトセトラは、筆者が代表を務めるアフリカ理解プロジェクト刊「原木のある森　コーヒーのはじまりの物語」でも詳しく紹介されています。ぜひ、手に取ってご覧ください。

アフリカ理解プロジェクト
http://africa-rikai.net/

今、領土について考える

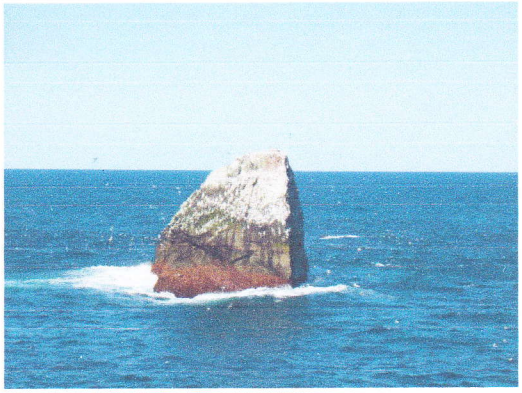
ビトン在住　大貫周明

日本では最近、尖閣諸島や竹島の所有権問題で領土問題がクローズアップされておりますね。北方領土もそうですが、その解決には膨大な時間が掛かります。
国の領土とは一体いつ誰が決めるのでしょうか。。。最初に住んだ人の国の物なのか、実際に現在住んでいる国の人達の物なのか、過去に追い出された人達の物なのか、、、隣国に認められねば境界線もハッキリしませんし、未だ所有権があやふやな土地は、世界のあちらこちらに散見されます。そこで、今回はこの重いテーマである『領土とは？』について、小生の知っているあまり役に立たない変わった領土の話しを書きたいと思います。

① ウェーブランド

誰かウェーブランド（The Global State Of Waveland）をご存知でしょうか？

なんとコレです↓



ただの直径２７ｍの岩ですが、ここに約１万５千人もの住民が登録しているそうです。どうみてもただの岩ですが、排他的経済水域・領海がかなり広くなる為に元々はイギリス・アイルランド・デンマーク・アイスランド他が領有権を主張していたそうです。そこで、所有権があやふやなうちに、海洋生物の環境保護の為にあの環境保護団体「グリーンピース」が 1997 年に実力行使で占拠したそうです。具体的には小屋を建てて人が住み込んで実行支配し、その後、独立宣言したそうです。（まだどの国も承認していない）
　今、ここが正式には誰の領土なのか良く判りませんが、国となる為に必要な

条件とは『国民・主権・領土』であると学校で教わりました。このまま実行支配が続けば実質その人達の領土になるのでしょうか。ちなみにここの住人とされる約１万５千人の住民はウェーブランドの公式 HP でインターネット登録で簡単に住人登録が出来ますよ（H24.10.26 時点でまだ OK でした）。
あなたもこのあやしい国？の住人になってみますか？

公式 HP は　http://www.waveland.org　です

ちなみに、島と岩の定義は判りませんが、日本最南端の沖ノ鳥島は満潮時には海抜１０センチの岩（日本国の認識としては島）で、波の浸食で岩（ではなく島）が無くならないように３００億円かけてチタン合金で保護していると聞きます。この岩の維持には毎年何億円か費用がかかっているそうです。（東京都の所有）
そう考えると、ウェーブランドの事を笑えないですね。僕ら。

② マルタ騎士団

私は過去５年間、地中海にあるマルタ共和国に１年のうち半年を過ごしておりましたが、それ以前はこのマルタ騎士団の存在について全く知りませんでした。
日本国はまだ認めておりませんが、マルタ騎士団は領土の無い国なのです。
国旗も国家もあり、世界９４カ国と外交関係を持ち、大使館のような出先機関も各地にあり（日本にも）、なんと国連にも毎回出席しています。現在、国連には 193 カ国が加盟しており、そのうち９４カ国がマルタ騎士団を国として認めており、マルタ騎士団のパスポートの使用まで認めているので、これは立派な国ですね。小生の友人にも『マルタ騎士団人』？というのか？が多くいます。
フランスに占拠されるまではマルタ島が領土だったのでマルタ騎士団と呼ばれているらしいです。正式名称はなんかすっごく長くて全然覚えておりません。
で、ネットで調べたところ『Sovrano Militare Ordine Ospedaliero di San Giovanni di Gerusalemme di Rhodi e di Malta』と言うそうです。日本語では「**ロードス及びマルタにおけるエルサレムの聖ヨハネ病院独立騎士修道会**」だそうです。
この国の歴史は古く 900 年以上の歴史があります。歴史が複雑ですので、もしこの国に興味があれば、下記の公式 HP http://www.orderofmalta.int　にアクセスしてみて下さい。ちなみに小生、マルタ語を少し話せますが、世界で３０万人しか使用されていない言語ですので全く役には立ちません。

③ シーランド公国

私はずいぶん前からその存在は知っておりましたが、昨年日本のテレビで紹介されて結構有名になった「超へんな国」です。
これが国と言うのですから。。。↓

元々は第２次世界大戦用にイギリスが造った海上要塞ですが、戦争が終わり要塞を放棄。誰もが忘れていたその要塞を、元イギリス軍の少佐が突如占拠し、シーランド公国の独立を宣言しました。もちろん、当時、イギリスは裁判を起こしましたが、国の主権が及ぶ３海里よりも離れており、戦後、廃墟として廃棄した為に所有権も認められず、公海上なのでイギリスの司法の適用外という理由で敗訴。こうして「へんな国」が誕生しました。(国連加盟国は未承認)
国土わずか６０坪、国民は４人。でもこの国を巡って色々な事があったようです。例えば、ここをカジノにしてひと儲けを企てたドイツ人投資家にクーデターを起こされたり、奪回したりと。。。まぁ、このクーデター騒ぎがあって、西ドイツが外交官を後処理の為に派遣したという事があり、国として認められた？とか。
現在の主な国の収入源は自国の通貨・記念切手（これは使えるのか？）や観光。それと一番有名なのが爵位を販売。たった３０ポンドで誰でも男爵になれます。昨年、私も日本のTV番組で見ましたが、「西川きよし」さんも買っていました。
ただし、あくまでもシーランド公国の爵位ですが。。。(ネット申込も可能です)
男爵になりたい方は こちらへ → http://www.sealandgov.org

← この男爵証明書セットが£29.9

それと、この「国」が一躍有名になったのは、国を売り出した事です。売国！！
その価格、約１５０億円です。安いのか、高いのか。。。（高いと思います）
２００７年にスウェーデンの違法サイト会社が買う表明をしたと新聞記事に
なりました。
現在、この国の購入資金を一般人から募っているそうです。購入資金の出資者は
シーランド公国の市民権を与えられ、将来、特典として違法ソフトや映画、音楽
（いわゆる著作権の絡む財産）をダウンロードし放題というシステムになって
いるようです。これはもはや国というより悪徳商売ですね。
この先どうなるのでしょう。。。

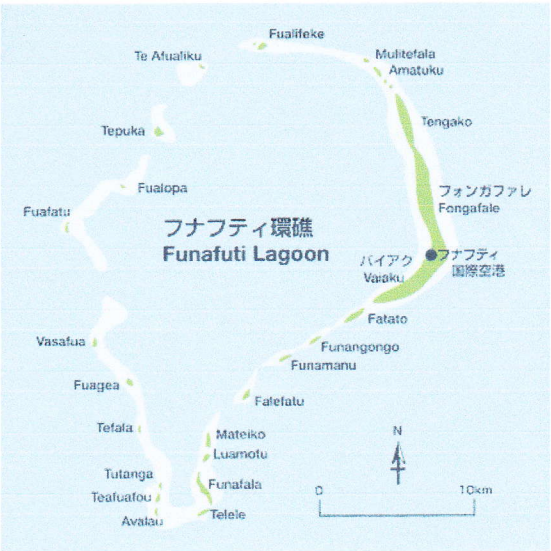
ちなみに、調べたらイタリアのアドレア海に同じように海上要塞（１２坪：２LDK
サイズです）を建設して勝手に独立宣言した国もありました「ローズ島公国」
です。イタリア領海のわずか３００ｍ外にあり、国民１人（ローズ大統領のみ）。
シーランド公国のように切手の販売やカジノ運営を計画していたそうですが、
１９６９年にイタリア海軍によって爆破されております。国が爆破された後、
ローズ大統領は亡命政府をつくり、ローズ島公国の切手の販売で生活していた
ということです。
失敗の要因としては、おそらく、イタリア領海に近すぎた事で、独立宣言後、
どの国もローズ島公国を国として認めなかった事でしょう（たぶん）。
シーランド公国は独立宣言後、色々な事件に他国を巻き込んでいたので
イギリスも容易に手を出せなかったのだと考えます。

④ スヴァールバル諸島（ノルウェイ領）

ご存知の方は少ないと思いますが、ここは日本人であれば誰でも好きなだけ滞在
でき、商売でも事業でも何でも自由に出来るのです。つまり日本人がそこの国の
人と全く同じ権利を持つ事が出来る国です。どうしてかというと、複雑な説明は
省きますが、第一次世界大戦の後処理のパリ講和条約でここはノルウェー領と
なり、その際に締結されたスヴァールバル条約の中に戦勝国は権利を別けあうと
いう条項があり、第一次大戦の戦勝国だった日本もノルウェー人と同じ権利を所有
出来る土地となったそうです。
この約束はまだ生きておりますが、なんせ氷の楽園と言われる場所だそうで、誰も
行く人はいないのでしょうね。ちなみに、領土にはスヴァールバル大学もあり、
この領土の面積はなんと九州程もあります。でも一体どうやって行けば良いのか、
誰か情報下さい。

⑤ ツバル

珊瑚礁から出来た環礁国として知られています。総面積はわずか２６キロ平米ですが、形が輪っか状なので、周りの領海は１３０万キロ平米にもなるそうです。
私が是非一度行ってみたい場所のひとつでもあります。
とても有名な話しですが、あと数十年で海中に沈む国と言われていますね。
現在、空港も水没し始めたと聞きます。
諸説ありますが、地球温暖化の影響が最大の原因と言われております。
３０年程前に独立した国なのにあと何年かで国が消滅するとは。。。
元々が海から盛り上がっていた砂溜まりの上に人が住んでいたようなものなのでしょうか。土地が貧弱で農作物もあまり収穫されてそうにありません。
１万人のツバル国民はこの数十年以内に外国へ移住しなければならないそうです。
でもツバルの国民はお金が無いから隣国ニュージーランドは条件付きで毎年７５人まで。オーストラリアは受け入れ拒否しているそうです。
国土を失い移住してゆく人達はツバル国民ではなくなるのでしょうか。
この先どうなるのでしょう。。。



世界には他にも不思議な領土が多く存在するようです。
この周辺の公海上で人の住める無人島が残っていたら是非お知らせ下さい。
まずは、いつか自分が行って住んで独立宣言して大統領になりますので。

では。

今、領土について考える　その２

ビトン在住　大貫周明

前回に引き続き、小生の知っているあまり役に立たない変わった領土・国の話しを投稿させていただきます。水産物商社勤務時代、自分は仕事柄各地へ飛び回っておりました。
なかなか珍しい場所へも出張させていただきました。主に欧州とアフリカ方面です。その際に訪問し見聞した内容をいくつかご紹介させていただきます。

① サハラ・アラブ民主共和国

通常、西サハラと呼んでいる国です。実際にはモロッコの占領下に置かれております。西サハラのダクラという港町はアフリカタコの産地として有名で、日本や韓国の水産商社マンが検品と入札に行く事で知られている程度です。小生も当時、よく買付けに行っていました。港の周り以外は一面の砂漠です。国土の 99.9%は世界一大きい砂漠であるサハラ砂漠なのです。サハラ砂漠はどのくらい大きいかご存知でしょうか？アフリカ大陸の1/3。なんと日本の国土の 25 倍です。ですから世界で最も人口密度の低い国でもあります。
１キロ平方メートルあたり１人です。１キロ先まで行って１人会えるという計算ですが、実際は遊牧民がテント生活しているので、20 人単位の遊牧民だとしたら 20 キロ歩いて会えるかどうか、というレベルです。このレベルの人口密度の地区が日本の 25 倍あるのですから世界は広いのですね。
私はこの一面の砂漠の中を２日かけてモロッコのアガディールまで車で移動しました。初めて見る砂漠にとても感動したものですが、変わらない風景に飽きて 30 分後には寝てました（笑）。
さて、そんな砂漠の国「西サハラ」ですが、ちょっと複雑な事情がある国です。国連加盟国の約４割（80 カ国）は国として承認しておりますが、それ以外の国からは承認をされておりません。日本も未だに国として承認しておりません。
簡単に歴史を紹介しますと、19 世紀の欧州の植民地支配が盛んだった頃は、西サハラはスペインの領土だったのですが、砂漠ですから実際にスペイン人が乗り込んで何かやったという事はなかったそうです。とりあえず、だれのものでもない場所だったから、ここはスペインの領土ですよ、と宣言しただけのようです。普通はどこかの国が勝手に領土を占領したら先住民よる反対運動とか反乱が起こりそうなものですが、先住民のほとんどが遊牧民ですので、

もともと砂漠の民には国家という概念自体が無かったので、何も起こらなかったそうです。遊牧民は広大なサハラ砂漠を行ったり来たりしているので、国境や国家なんて関係ないようです。実際に「あんたスペイン人？」と言われても何の事か判らないでしょうし。。。
その後、1975年にスペインがこの土地の権利を放棄しました。砂漠だから？
第2次世界大戦後、アフリカ各地で独立運動が広がり、西サハラも独立しようとしますが、西サハラで燐鉱石資源が発見されてから、隣国の大国であるモロッコが攻めて来ました。西サハラはいとも簡単にモロッコに占拠されてしまいましたが、その後、国連の仲介で、「西サハラ」として独立するか、モロッコに吸収されるかは西サハラの国民投票の結果次第という事に。
これが1991年の事です。その後、どうなったかと言うと、、、、
実はまだ国民投票が行われておりません。理由は**「だれか国民かがハッキリしないから。。。」**。すごい理由ですね～。
もともと遊牧民というのは各国にまたがるサハラ砂漠を自由に遊牧しているうちに他国も行ったり来たりしているので、ある意味でどこの国の人でもないのかもしれません。まあ、当の本人達も国家がどこの国に所属しようと、どうでもよいのだろうと思いますが。
このすごい理由で国民投票が毎年毎年延期されて今に至っております。
実際には、空港も港湾も主な産業はモロッコ財閥に抑えられ、どの施設・ホテルにもモロッコ国王の肖像絵が掲げられていますので、モロッコなわけですが。。

ちなみに、鳥取にあるのは砂丘で砂漠ではありません。ラクダは居ますがね。。

② モナコ公国

欧州には、ほんとうに小さい国が多数存在します。
アンドラ、バチカン、サンマリノ、マルタ、リヒテンシュタインなど。。。
私はじつはミニ国家マニア？でして、仕事の合間にこれらミニ国家に観光へ出かけていました。モナコは周囲をフランスに囲まれた小さな国です。
バチカンに次ぐ世界で2番目に小さい国で、最も幅が狭い場所はたった5分で縦断できちゃいます。モナコグランプリやカジノだとか脱税で有名ですね。
お金持ち達の住む国というイメージですが、実際、その通りなのです。
あと、なぜかモナコの主な観光地に“日本庭園”というのがありました。
そんなモナコ公国ですが、インドネシアの国旗と全く同じ国旗なのです。
上半分が赤、下半分が白。これはただの偶然です。ちょっと調べたところ、

インドネシアの国旗は白は潔白を、赤は勇気を表しており、「潔白の上に立つ勇気」という意味があるそうです。
国旗の件で、両国間で何度も話し合いが持たれたそうですが、どちらも譲らず今に至っているようです。何かの試合でインドネシアVSモナコとかあった場合、何だかとってもややこしそうですね。
ちなみに上下を逆さにするとポーランドの国旗になります。
何の関係もありませんが。。。

③ サンマリノ共和国

せっかくなので欧州の他のミニ国家も紹介したいと思います。
イタリアの山中にサンマリノ共和国という国が存在します。国と言っても、バチカン市国のようにイタリアとの国境はとくに仕切られている訳でもないので、入国審査も税関もなにもありません。自由に出入りできます。
世界で5番目に小さい国です。名物はサンマリノGPというモーターレース。その他でこの国の名前を聞く機会はなかったのですが、日本が誇る長寿（平均寿命）で、2005年にサンマリノの男性平均寿命が日本の79歳を抜き、80歳で世界一になった事がありました。その長寿の秘訣は未だに判りません。。。
そもそもの国の成り立ちは、ローマ皇帝によるキリスト教の迫害を逃れる為に人々が山奥に移り住んだ事が始まりのようです。あまりにも山中の為、あのナポレオンがイタリア半島を占領した際も、サンマリノは占領されなかったそうです。こんな山中でよく国として存在し続けているなぁ、と不思議です。
主な産業は観光で、人口3万人の国に対し、年間300万人もの人が訪れます。人口の100倍ですね。こんな田舎に何を目当てに来るのかと言えば、大統領の交代の際のパレードです。あいにく私は見ていませんが。。。
聞くところによると、それはそれは盛大なパレードが行われているそうです。で、調べました所、この国の大統領は2人元首政、これは大統領が2人いる制度の事だそうです。任期の前半と後半を2人が交代して執政する制度だそうで2人で任期は6ヶ月。。。。という事は、3ヶ月毎に大統領が変わるので、年に4回もパレードがあるという事です、、、、なんじゃそれ。
このパレードで国の観光収入を得るとは、なかなか考えたものです。

日本の首相も政局が変わるたびにコロコロと変わるので国際的に批判されておりますが、日本もパレードすればいいんじゃないでしょうかね？

④ セルボガ公国

またまたイタリアに囲まれたミニ国家の紹介ですが、これまたちょっと
変わった独立国です。イタリアの北の果てなので、行くのは大変ですが、
フランスの観光地のニースからは２時間位で行ける場所にあります。
ここも国境も税関も何も無いです。風景も同じなのでどこからセルボガ公国
に入ったのか最後まで判りませんでした。
資料によると人口たった 320 人、国土面積 14 平方キロ。うわっ、ちっちゃ！
でも歴史は古くて 10 世紀にはすでに存在していました。
一時期ローマ帝国に吸収されてしまいますが、再度独立を果たします。
第 2 次世界大戦後にイタリアの領地になりました。と普通ならばこれで話しは
終わりますが、ここからがすごいんです。
戦後、領土を編成した際に締結された書面に「セルボガ公国をイタリアの領土
とする」という記載が無かったのです。あまりにも小さい国だったので誰から
も忘れられていたと解説されています。(笑)
しかもセルボガの人達も、長年、自分らはイタリア人になったのだと思い
込んでいたのですが、初代元首となるカルボーネさんが当時の領土条約書面の
不備を見つけ出して、1995 年に独立宣言したのです。
これに一番驚いたのはセルボガの人達だったと伝えられております。(笑)
自分らイタリアの方がいいのに、という事らしいです。
まぁ、イタリアの方が行政サービスがちゃんとしているからなのでしょう。
とりあえず、独自の通貨や切手を発行したりして独立国家を主張しています。
が、現実にはセルボガ国内でもユーロが普通に使われており、逆に独自通貨は
使えませんでした。まぁ、この国の紙幣は「おみやげ用」ということでしょうか。
ネットで調べましたら、日本セルボガ友好協会やらセルボガ公国駐日代表部
というものもありますが、主に観光案内と特産品の紹介をしているようです。
ちなみに、諸外国はどこもセルボガを国として承認しておらず、イタリアも
セルボガ村としてイタリア領と位置づけているそうですので、無理して独立
しなくてもいいんじゃないか？という感じの“村”です。
でも、この独立宣言以降、観光客を呼ぶいいネタになっている事は確かですね。

⑤ リヒテンシュタイン公国

あのアニメ「ルパンⅢ世 カリオストロの城」のモデルとなった国です。
なのでオタクには有名？と勝手に思っていますが、名前は聞いた事があるのではないでしょうか。スイスとオーストリアに挟まれた人口3万3千人の世界で6番目に小さいミニ国家です。通貨はスイスフラン。
とても放牧的で雰囲気のある国で風景は古き良き欧州のイメージです。
ガイドブックによってはリヒテンシュタイン候国と記されているものもありますが、これも間違いではなく、リヒテンシュタイン一族が国家を納めています。
このリヒテンシュタイン侯爵一族の統治は300年以上、15代も続いています。
元々このリヒテンシュタインさんは大変な大金持ちで、欧州各地に資産財産を蓄積・運営しているそうです。欧州最後の絶対君主制の国とも言われておりますが、一般国民は所得税・贈与税・相続税は無く、学校、医療もタダ。
なんと住宅ローンも無利子で借りられるそうで、国民は幸せなようです。
無税なので免税目的の外国企業が集中し、人口数以上に会社数があるという変な国でもあります。これら企業の法人税が国家収入の40%を占めるとも言われております。
植田健嗣氏著書の「リヒテンシュタイン侯国」（郁文堂）によりますと、この国にも刑務所があるそうですが、受刑者の部屋はホテルのように清潔で、娯楽室・ジム・図書館・映画館など充実しており、受刑者は160人程度なので、食事をつくる設備を運営するより、ホテルのケータリングサービスの方が効率的なので、ホテルが受刑者の食事を提供しているそうです。
果たして、これでいいんでしょうか？？

⑥ クリスチャニア

これは国なのか未だに良く判りませんが、不思議な場所なのでご紹介します。
場所はデンマークの首都コペンハーゲンの中にあります。
井上ひさし著書の小説「吉里吉里人」には独立国家と紹介されていました。
でも、何にもその根拠が無いような。。。実物はただの街の一区画でした。
ネット上では「解放区」「自治区」「無政府主義」などと紹介されているようです。
元々は軍隊の兵舎の跡地を不法占拠した方々が独立宣言したそうです。
人口は約1000人。クリスチャンの集まりかな？と思ったら大間違いでした。
住人は変わり者の集まりのようで、斬新な音楽家や芸術家が多いそうです。
で、芸術と言えばマリファナ？ マリファナが自由に吸える地区としても

よく知られています。オランダのアムステルダムもそうですね。
芸術品の他、無農薬有機栽培の野菜の販売等が主な産業のようです。
独自通貨もあるらしいのですが、見つけられませんでした。
マリファナの関係なのか、欧州中のヒッピーと世捨て人が集まりましたよ、
という感じのゆるゆるで自由な雰囲気です。
駅から５分とアクセスが良いため、ちょっとした観光地になっています。
というか、コペンハーゲンって人魚像くらいしか観光地がないので。。。
でも、わざわざ見に行くような所ではありません。念のため。

⑦ グリーンランド

誰もが世界地図で一度は目にした事があると思います。国土は日本の６倍。
あの北極の近くのデッカイ逆三角形の土地ですね。グリーンランドって書いて
いますよね？　だのになぜ？ あれは実は国ではありません。
正式にはデンマークの領地なのです。また、グリーンランドは世界最大の“島”
だそうです。小生には“島”と“大陸”の区別が判りませんが。。。
小生はまだ行った事はありません。
が、その生い立ちが面白かったので紹介します。
長年、あんなに北部にあって何で「グリーンランド」？と素朴な疑問でした。
ネットで調べても国土の８割が氷に覆われていて、エスキモー以外、長年無人
の不毛の氷の土地だった、となっております。
実はこの島、今から1000年以上も前にノルウェー人のエリック（殺人犯）
という犯罪者が逃亡中に発見した島だそうです。このエリックは何だか
すごくって、まず最初は逃亡中に「アイスランド」を発見し命名しました。
自分の国を作ろうと入植者を募ったそうですが、アイスランド。。。名前からして
寒そうな土地（実際氷に覆われていますが）だった為か、誰も行きたがらずに
建国を失敗していたのです。
そこで次に発見した極寒の地を勝手に「緑の広がる大地がある」と大嘘で人を
集めたそうです。それが「グリーンランド」という名前に。。そんでいいのか？
その時の入植者の子孫は500年後には５千人まで増えたそうですが、伝染病で
全滅したそうです。その後、数百年、エスキモーだけの土地にもどりました。
先住民族のエスキモー（イヌイット）がいましたが、このエリックのせいで、
グリーンランドは今でもデンマーク領のままなのだそうです。
なぜ、ノルウェー人のエリックの発見なのにデンマーク領なのかと言いますと、
1536年にノルウェーはデンマークの属国になった時期があり、そのまま現代に

至るのだそうです。
現在では人口は5万人以上となり80%以上はエスキモー（イヌイット）です。
なお、このエリックさんの息子はレイフ・エリクソンといいコロンブスよりも500年も早くアメリカ大陸に上陸した冒険家として知られています。
紹介文によっては“バイキング”だったとも書かれていますが、この息子、せっかくアメリカ大陸に上陸したのに、主権を宣言しなかったので、歴史上アメリカ大陸の発見者は500年後にやってきたコロンブスという事になっているようです。
親子揃って何だかなぁ、です。

一応、このシリーズの投稿はここらで終了しようと思います。
それにしても、国ってどんどん出来るものなのですねぇ。
2011年7月には南スーダンという国が出来ました。現時点で一番新しい国です。
最近ではパプアニューギニアのブーゲンビル島（元々ブーゲンビル共和国）が独立するのでは？とも言われています。

世界には色々な事情の国や地域がありますが、日本も北方領土、尖閣諸島や竹島が未解決のままになっております。領土って、結局、言ったもの勝ちじゃないのか？という気もしてきました。日本の新首相になられた安倍さんには是非頑張って貰いたく思います。

以上

燃え上がった尖閣諸島

長崎　節夫

1970ごろからくすぶっていた尖閣諸島問題ですが、ついに炎をあげて燃えあがりました。現在は尖閣争奪戦の中盤戦にさしかかったというところでしょうか。序盤戦での日本政府の対応に非常に腹がたちますが、怒っているだけではしょうがないので、この問題をすこし整理してみたいと思います。

1. 中国が尖閣諸島を欲しがる理由

①. 中国が尖閣奪取の意思表示をはじめたのはよく知られているとおり1970年、国連による東シナ海の海底石油資源調査報告のあとからです。 しかし、石油資源のことがなくてもいずれちょっかいを出してきたと思います。その理由は、領土の拡張(それに伴う海洋の獲得)、ついでに国内政治事情です。石油はたまたまタイミングよく顔をだしただけかもしれません。

②. 領土拡張欲は中国の本性のようです。 しかし、最近の南シナ海や東シナ海における中国のなりふりかまわない行動は、単に領土拡張の意味だけでなく、食料庫としての「海」の獲得が大きな目標のようにみえます。領土と経済水域、それに安全保障がセットになって、欲望がより強烈になったということでしょうか。

③. もうひとつ重要な理由は、これはマスコミなどでもよくとりあげられていることですが、中国国内政治の事情があると思います。あれだけの広い国土に13億の人間、これを統治するのは大変なことにちがいありません。とくに近年は国民の経済的な格差が拡大して日常的に大小の暴動がおきているようです。むつかしい内政問題から国民の目をそらすためには、外部に国民共通の敵を仕立てあげるのが手っ取りばやく効果的です。日本は「国民共通の敵」として仕立て上げるためには申し分ない条件をそなえています。満州事変以降1945年の終戦まで中国国内をかきまわした実績があるし、イチャモンをつける材料にことかかない。日本国内に中国シンパが大勢いるのも好都合です。

2. 戦況解説

「不謹慎」といわれそうですが、尖閣諸島の紛争をボクシングの試合に例えて戦況を解説してみます。まず最初に、この試合のルールを説明しましょう。

① 日本選手は防御だけ。攻撃してはならない。中国選手は防御攻撃すきなようにやってよろしい。
② 時間制限なし。片方がダウンするか両方へたばって戦意をなくしたときが終了。
③ 基本的に1対1の対決であるが、「場合によっては」第三者の応援も可。

以上3点だけです。①のルールは日本にとって非常にしんどいハンデです。相手はすきな時に好きな手段で手出しできます。日本はただひたすら守るだけ。しかし、③のルールで少し救いがありそうです。第三者の応援いうても中国に応援してくれるのは北朝鮮くらいでしょう(北朝鮮も最近はミサイルもとばせるようになって張り切っています)。 日本の応援席には第7艦隊がいますけん。

それではこれまでの試合の流れをふり返ってみましょう。(付録の尖閣年表参照)

試合のゴングがなったのは1972年です。すでに40年経過しました。開始から2009年までが序盤戦といえます。開戦当初、中国が宣言あるいはデモンストレーションだけにおさえて、それほど手かずを出さなかったのは、様子見とともに中国側がまだ準備不十分と感じていたと思われます。1990年代以前には、中国はまだ経済力も弱く、日本との体力の差は歴然でした。2000年以降急速に体力をつけ、逆に日本は衰弱して力関係がかわりました。このへんでそろそろ攻勢に出ようということで漁船団や漁業監視船をくりだし、ポイント稼ぎに出てきました。

日本としては防戦につとめるしかありません。試合は、日本の領土を相手が欲しがって、日本はそれを守るというのがテーマですから。つらい話です。

最近、日本は陣地の中に踏み込まれたりしてポイントを稼がれています。先ほど(2012年12月14日)には空か

らも侵入されました。海上の防御は海上保安庁の担当ですが、頭の上は航空自衛隊の担当です。一触即発という状況になってきました。今は中盤戦のおわりごろというところでしょうか。日本としては早急に態勢を立て直したいところで、まずリングサイドのセコンドを入れ替えました。(政権交代)
ここまで来て、日本側応援席のアメリカに動きがみえました。いざとなったら日本を支える構えです。当然ですが中国側からブーイングがおきています。

この試合まだまだ先は長くなりそうですがどうなるでしょうか。

と、ボクシングにたとえてみましたが、もちろん尖閣問題はスポーツなどではなく正真正銘の国際紛争です。日本はともかく、中国は槍を研いで、ミサイルも構えて、本気でかかってきています。日本側も第一線の海上保安庁は必死に防戦していますが、保安庁の戦力だけでは荷が重い。後備えに自衛隊を配置する必要があります。後方の応援席(一般国民)はいまいち事態を理解していないようにみえます。肝心の沖縄で敵味方間違えて相手を応援する者もみえます。 中国は一党独裁の強みで応援団も一致団結しているようにみえます。

3.「抑止力」について

この種の国際問題は、起こってしまってから解決を図るのは非常に骨のおれることです。場合によっては永遠に解決できないかもしれません。やはり問題を起こさないように心がけることが最善です。相手に事を起こそうという気をおこさせないようにふるまう。隙をみせない。「抑止力」とはそういうことでしょう。

遅きに失した感もしますが、今からでも外灯、防犯カメラの設置など防犯対策をいそがなくてはなりません。とくに宮古、八重山、与那国など先島方面は監視態勢、戦力の空白地帯になっています。
機関銃を持って押し込んできた相手に対して、「話せばわかる」は通用しません。備えあれば憂いなし。転ばぬ先の杖です。

4 南シナ海の教訓

中国との間に領土紛争をかかえる国は日本だけではありません。

南シナ海南沙群島のミスチーフ礁は、ベトナムやフィリピンが経済水域を主張し(フィリピン・パラワン島から130海里)、双方の漁船の操業区域でもありました。日常的にはフィリピン艦艇のパトロール区域でもあったようです。1995年、フィリピン議会は期限がきていた米比相互防衛条約(安保条約)を解消し、在フィリピン米軍は撤退しました。それを待ち構えていた中国は船団をくんで侵入、あっという間にサンゴ礁の上に施設を建造し居座ってしまいました。「実効支配」というわけです。 フィリピンやベトナムが抗議しても手遅れです。

スカボロー礁は、ルソン島西岸のサンバレス州から西へ90海里、ほぼ二等辺三角形のサンゴ礁です。私が見た1985年ごろには中華民国(台湾)も自国領土と主張していました。 近辺海域には台湾のまぐろ漁船が日常的に操業していましたが、サンゴ礁周辺と礁湖内は実質的にはフィリピン漁民の漁場で、在比アメリカ空軍、フィリピン空軍の演習区域でもあり、フィリピンのコントロール下にありました。 そのころ中国漁船はスカボロー礁近辺に姿をみせていません。(1980年フィリピンは経済水域を設定、スカボロー礁は経済水域に組み込む。「このサンゴ礁は島ではない」と解釈した)

スカボロー礁に中国がちょっかいをだしはじめたのがやはり1990年代後半からです。米軍撤退後の力の空白を狙われました。 フィリピン海軍は劣勢ながらも粘って、侵入を繰り返す中国漁船を拿捕したりしています。
昨年(2012年)4月には中国漁船を拿捕したのをきっかけに双方の公船がにらみ合う事態が続いています。にらみ合いと平行して中国によるフィリピンに対する報復措置(バナナの輸入関税増額、フィリピン観光の自粛など)が実施され、中国への経済依存度の高いフィリピンは音をあげているとのことです。

5. 中国による領土略奪の傾向と対策

中国の領土・領海拡張の意欲はほとんど本能と化しているようです。 しかし、領土領海拡張の「本音」を外に

向けて公言するわけにもいきません。恥ずかしい。 そこで、「歴史的に・・・」という説明がでてきます。 世界中の国々が「歴史的に」と領域を主張しだしたら、地球上はめちゃめちゃになってしまいます。
現在、中国の当面の目標は、南シナ海・東シナ海を全部ほしいということです。理屈はどのようにでも考えたらよい。 その中国のやり口をみると、ある傾向が見えてきます。

① 漁船団を先頭にたてて目的地への侵入を図る。・・何十隻もの漁船団を編成しておしかける人海戦術。中国伝統の戦術です。
② 漁船団の後方に漁業監視船などの公船が追随していて、いざとなれば表に出てくる。
③ 目的地に侵入できたら迅速に施設を構築し実効支配を宣言。(典型的な陣取り合戦)

ミスチーフ礁は防御の空白をつかれてあっという間にやられ、スカボロー礁も侵入をゆるしてにらみ合いが続いています。
尖閣にも再三アプローチしていますが、海上保安庁はフィリピンほどヤワではなかった。今のところまだ持ちこたえています。中国としてもまだ軍艦を出す段階ではありません。 領海侵犯をくりかえしてポイントを稼ぎ、国際社会にもアピールする。 そして相手のスキを見て、漁船・監視船をして尖閣諸島内のひとつの島にとりつかせ、とりついたらすぐに軍艦がでてくるという段取りでしょう。 もちろん米軍の動きを見ながらですが。
日本側の対策としては、第1に、中国の企てをあきらめさせることです。粘り強い外交交渉、国際社会へのアピールはもちろん必要ですが、物理的な防御力を高めなくてはどうにもなりません。

第2に、国際社会への目配りが重要です。 日米同盟にたよるだけでなく国際社会に日本の主張を強力に発信していく。「宣伝戦」とも言われますが日本はこの部分が弱いように感じます。 逆に、宣伝戦は中国の得意とするところです。

第3に、「尖閣問題に日本がどのように対応するか」、フィリピン、ベトナム、マレーシア、インドネシアなど、南シナ海に接する国々はかたずをのんで見守っています。共通の問題をかかえている国々との連携も大事です。領土防衛に関する具体的な協力策を考えてもよいと思います。 たとえば巡視船・艇の提供とか乗組員養成の支援とか。
沿岸の監視・防御態勢という意味では、フィリピンはほんとにお粗末な状態です。インドネシアも決して十分とはいえません。日本も尖閣問題の加熱で巡視船のやりくりだけでも大変な状態でしょうが、南シナ海沿岸諸国の領土保全にも目配りできたらよいと思います。

もうひとつ重要な問題。
中国に進出している企業の問題があります。領土問題と経済は別だという考えもあるようですが、いざとなればそうもいきません。 二国間で問題がこじれたら直ちに資産差し押さえ、日本人は拘留され、取引材料にされます。 あたりまえのことです。 現実に、2010年の衝突事件でも駐在商社員の拘留、レアアースの禁輸など「報復措置」が実行されています。
日本の中国進出企業はそのリスクを覚悟のうえでやっていると思いますが、イザ鎌倉となったらやっぱり相手の持ち駒になってしまいますね。(完)

(蛇足)
相手のいやがることをやってはいけないのか

尖閣諸島問題に対する歴代政権(外務省?)の対応をみていて不思議に思うことがあります。尖閣の島々への上陸禁止措置です。一般民間人のみならず行政管轄権のある石垣市の市長・職員でさえ寄り付くことができません。灯台などの施設建造も絶対ダメ。理由はただひとつ、「中国が嫌がるから」。 われわれ凡人には理解できません。
スポーツでも囲碁などのゲームでも、勝敗を競う「勝負事」の世界で、相手の喜ぶことだけやって嫌がることはやらないとなるとどうなるのか。 勝負事は相手が嫌がることをやるのが勝つための条件です。相手の注文にハマレば必ず負ける。
尖閣争奪戦において日本政府は相手のいやがることをやらないことに徹してきました。中国が何故日本人の尖閣諸島上陸をいやがるかというと、(子供でもわかることですが)日本に実行支配をゆるすことになるからです。これは勝敗に重大な影響があります。決定的ともいえる。 巡視船100隻で守っても、無人島のままなら中国にもチャンスがある。 たのむから日本人は常駐しないでくれ。

政府がうまく立ち回っていたら、今頃、魚釣島には観光ホテルもあって、測候所もあって、ついでにハワイ大学の臨海実験所も招致されていて、中国はとっくの昔にあきらめていただろうに。 残念!

（付録） 尖閣年表

1895年（明治28年）	1月14日　尖閣諸島を正式に日本領とする。（閣議決定）
1896年（明治29年）	政府は古賀辰四郎に対し尖閣諸島の30年の無償貸与を許可
1920年（大正9年）	中国福建省の漁民が遭難し魚釣島に漂着、石垣島の漁民が救助する。これに対し1921年中華民国駐長崎領事から石垣島の関係者（4～5名？）に感謝状が贈られた。この感謝状に「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島」と明記されている。複数名におくられたという感謝状のうち、2012年現在2枚が確認され、保存されている。
1932年（昭和7年）	尖閣諸島のうち、魚釣島、久場島、南小島、北小島の4島が古賀善治（辰四郎の子）に有償で払い下げられる。
1945年（昭和20年）	11月26日告示の「米国海軍軍政府布告第1－A」によってアメリカの軍政下にはいる。その後、「琉球列島米国民政不」つづいて「琉球政府」の管轄下にはいる。（1952年、台湾の国民政府と日本との間に「日華平和条約」締結。 この条約でも尖閣諸島が台湾に属するとは解釈されていない。）
1969~1970	国連が行った東シナ海の海洋調査で、尖閣諸島周辺に推定14億バレル以上の石油資源埋蔵の可能性が報告される。
1971年（昭和46年）	アメリカ在住中国人留学生などが反日デモ。「尖閣諸島は中国領」と主張。 6月、台湾が尖閣諸島の領有権を主張。
1972年	中国が領有権を主張。。 日中国交正常化（田中角栄一周恩来）
1978年（昭和53年）	4月　中国漁船約100隻尖閣周辺に集結（中央指示によるデモ？） 日中平和条約（園田外相一鄧小平） 10月　訪日中の鄧小平副総理は尖閣諸島の領有問題について「こういう問題は一時棚上げしてもかまわない、次の世代はわれわれよりももっと知恵があるだろう、皆が受け入れられるいい解決方法を見出せるだろう」とのべる。（いわゆる棚上げ論。日本側は何となく納得？）
1992年（平成4年）	中華人民共和国領海法制定。釣魚諸島は自国領であると記載。（棚から降ろした）
1997年（平成9年）	日中漁業協定締結
2004年（平成16年）	1月　台湾当局は魚釣島を土地登記 3月24日　中国の活動家7名魚釣島に上陸、沖縄県警が現行犯逮捕（出入国管理法違反）、3月26日強制送還。
2008年(平成20年)	6月　台湾籍遊漁船に巡視船「こしき」が衝突。日本側は巡視船の過失を認め、三千万円相当の賠償で和解。 12月8日　中国の漁業調査船2隻、尖閣諸島付近の日本領海内に侵入。
2009年（平成21年）	4月　石垣市長、地方税関係の調査目的で尖閣諸島上陸を中曽根弘文外務大臣あて申請するも却下される。（麻生内閣）
2010年(平成22年)	中国が尖閣諸島のある東シナ海を「国家領土保全上の核心的利益に属する地域」と主張しはじめる。 9月　久場島北西の日本領海内で操業中の中国漁船が日本の巡視船に衝突。船長を逮捕、後に中国の反発を受け処分保留のまま釈放。（この頃より中国公船によ

る領海侵犯が常態化する）

2012年（平成24年）	9月11日　日本政府、尖閣諸島国有化を閣議決定。 12月14日　中国当局の航空機、尖閣の領空を侵犯。 12月22日　アメリカ上・下院議院、尖閣諸島を日米安全保障条約の適用対象と確認する「国防権限法案」を可決。

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

編集後記

新年おめでとうございます。

一昨年の大震災につづいて昨年も円高不況に尖閣諸島の問題と、鬱陶しい年でした。さて、平成25年がどんな年になりますか。昨年末の政権交代で経済的には明るいきざしが見えていますが、ここが勝負どころです。新政権にはフンドシを締め直してがんばってもらいたいところです。

経済も問題ですが領土の問題も、北方領土竹島に尖閣と、頭痛の種が消えません。特に尖閣諸島については中国が攻勢を強めて一触即発の状況となっています。中国側のお国の事情はさておいて、責任の半分は日本側にもあります。日本政府、一般国民とも領土についての意識が希薄ではないかと思いますが、その淵源をさぐれば先の戦争で負けたことに尽きるのではないでしょうか。やはり、ケンカは勝たねばなりません。負けるケンカをやってはいけない。
「領土」について考えさせられるような昨今の時勢のなかで、大貫さんが非常にユニークな「領土」を紹介してくれました。人口13億をかかえる大国も大変ですが、小さい国もそれなりの問題をかかえているようすです。

長崎さんは尖閣近海波高しの状況にあおられて、にわか解説者になってしまいました。日系人関係のリポート、今号はお休みです。

北スラウェシ地方も経済活動が活発になってきたのか、メナドの街の様相が激しく変化しています。食べ物屋を見ても10年前とはほんとうに様変わりで、少しはまともなお店がふえてきました。今泉さんは飲食店実態調査班長になって、メナド市内のCaféからナシクニンの店まで現況を報告していただきました。続編を期待しています。

東京の石野さんにはエチオピア案内の冊子を送っていただきました。全部紹介する余裕がないので、まず食べ物のレシピを掲載しました。香辛料をたっぷり使った料理はミナハサ料理そのものです。試してみてください。

本会報19，20号に粟竹さんの「マカッサルの思い出」を掲載しましたが、今回はその前段のマカッサルまでの紀行文です。戦時中の日本からマカッサルまでの移動の記録は、ジャカルタ、マランでの出来事なども含めて非常に興味深いものがあります。しかし、南シナ海、バンカ海峡、マカッサル海峡と、敵潜水艦が網を張っていた海をよく生き延びたものです。それだけでも貴重な存在である粟竹さんには、もっといろいろ書いていただきたいとねがっています。
表紙はいつものとおり羽根井さん。今号の主役はブナケンのウミヘビ、ミーさんです。　今年もどうぞよろしく。

（長崎）